ニヒリズム・誠実・力への意志
――『道徳の系譜学』研究――

西川友和

初めに『道徳の系譜学』の前提について。『系譜学』はこれまで道徳的事実とされてきたものの虚性を暴露する。すなわち、無を神とする虚、無罪を罪とする虚、要するに無いものを有るかのようにみなす虚を、である。これに対してニーチェは、虚を虚として認めるよう要求する。すべては力への意志のあらわれであるという根本的前提（＝真理）に照らせば当然の要求である。これによって、道徳的世界解釈はもとより他の可能な世界解釈も、力への意志のあらわれとして同じ資格、虚という資格を付与されることになる。我々はこの前提を一先ず認め、ニーチェの所論を辿ることにしよう。

ニーチェによれば、ニヒリズムは歴史的に次の三段階を経て終息する。

第一段階（根源的ニヒリズム）。キリスト教が無を神に仕立て道徳的世界秩序を捏造する段階。力への意志が禁欲主義的僧侶のルサンチマンに働きかけ、同秩序を現成させる。

第二段階（神の死としてのニヒリズム）。禁欲主義的理想によって育まれた誠実さ（真理への意志）が理想（神）を否定する段階。理想とその核心である誠実さは、力への意志を親とする双生児の関係に相当する。理想（兄）とともに育った誠実さ（弟）が、力への意志（親）から十分な栄養を与えられて成長し、理想（兄）を殺害する。

第三段階（徹底的ニヒリズム）。理想の核心たる誠実さが自己批判をする段階。誠実さが理想の核心である限り、第二段階における神（理想）の死は貫徹されていない。神が完全に無に帰するためには誠実さそのものが自己批判されなければならない。誠実さ（弟）は自身の出自が力への意志であることを自覚する。この時をもって理想（兄）は完全に死に至る。その最終的帰結として、道徳としてのキリスト教は滅亡し、ポスト道徳的世界解釈の可能性が開かれる。ニヒリズムの進行過程は力への意志の自己貫徹の歴史であり、それがニヒリズムを現成させ消滅させるように、道徳の滅亡以後のポスト道徳的世界秩序も、力への意志のあらわれ、すなわち、虚であることに変わりはない。真に実在するのは力への意志のみであり、そのあらわれであるすべてのものは、解釈にすぎない。これは、すでに触れたように、先の「前提」から導き出される当然の帰結であり、ニーチェもそうしたものとして新しい価値秩序を構想していた。

すべての世界解釈は虚である点において同資格である。したがって、諸々の世界解釈間の違いは、それらが如何なる虚であるのかにかかっている。力への意志のあらわれ方の相違が諸解釈の特性を別つ基準になる。

さて、本論は、上記の「前提」に基づく系譜学理解に対する幾つかの疑問を手がかりに、『系譜学』というテクストの構造を明らかにし、あわよくばその読みの可能性を広げることを目的とする。そこで以下、その疑問点を列挙して行く。

疑問点その一。言うまでもなく、誠実さは、罪の意識や良心の呵責などと同様、キリスト教の徳である。自己批判を本性とする

誠実さがそれを遂行し、自身が力への意志を出自とすることが判明したとしても、果たして都合よく道徳としてのキリスト教は滅びるだろうか。

疑問点その二。ニーチェは、ポスト道徳的世界解釈を非・道徳的なものとして構想していたと思われる。私見によれば、それは反・道徳的な性格を持つ。非・道徳的（ルサンチマン的）と反・道徳的（ルサンチマン的）とを区別することは、ポスト道徳的世界解釈の性格を推し量る上においても、また『系譜学』というテクストの構造を解明するためにも重要である。もし、ポスト道徳的世界解釈が反・道徳的なものなら、それは、単に形を変えた道徳的世界解釈となる。疑問点その一と同様の帰結が導き出される。

疑問点その三。キリスト教の誠実さがルサンチマン的徳性であるなら、系譜学の真理性を支えているニーチェ自身の誠実さもルサンチマン的な刻印を帯びている可能性がある。系譜学の時間構成は現代を起点としている。したがってその現代におけるニーチェの境位の如何によって系譜学の性格が決定される、と言っても過言ではない。そこで、その代表として科学的無神論及び現代のキリスト教とニーチェとの隔たりを確認しておこう。

科学的無神論について。科学者は自分たちの真理への意志が神の死をもたらしたと主張するが、その意志（誠実さ）がキリスト教の理想の核心であることに無自覚である。それゆえ彼らは、真理への意志そのものを批判するには至らず、神（理想）を再生産し続ける。ニーチェも科学者も、真理への意志（誠実さ）が神を死に至らしめたと主張する。しかし、真理への意志の出自に対する自覚の有無によって、ニーチェは徹底的なニヒリズムへ、一方科学者は神（理想）との共犯関係に入る。

近現代のキリスト教について。神の死はこの近現代においては誰の眼にも明らかである。しかし、キリスト教徒はこの事態を見ようとしない。こうした否認は、ニーチェから見て恥ずべき態度である。無を神とする根源的ニヒリズムは、神は無であるという真実に照らして単に間違っているに過ぎない。この場合、信仰は、誤謬ではあるがリアリティを持っている。しかし、信仰にリアリティを持たない近代以後のキリスト教徒がなお神の死を否定するのは、間違っているだけでなく嘘をついていることと変わりがない。ニーチェによれば、ある意味で幸福な根源的ニヒリズムはもはや失われているのである。

無論、こうした隔たりがニーチェをルサンチマンに駆り立てた、ということの証明にはならないだろう。しかし、あえてそう読むことによって、我々は次のような根本的な疑問へ導かれる。すなわち、ニーチェの、無から神を捏造したというキリスト教批判そのものが、実はそのように批判するためにニーチェによって仮構されたのではないだろうか。つまり、ニーチェの反・ルサンチマンというルサンチマンが、批判対象を求めて、存在しないその対象を、勿論力への意志の概念を含めて、生み出したのではないか。

我々の目的は、疑点をあげつらうことにはない。『系譜学』というテクストは、ニーチェの道徳批判の現代における有効性もさることながら、道徳を批判することの困難さを教えてくれるのである。